

ペルナンブコ材の現状と今後の課題

一社) 全国楽器協会 CITES 委員
株) 文京楽器・株) アルシェ代表取締役社長
堀 西基

1. はじめに

私は 2022 年 11 月に中米パナマで開催された第 19 回ワシントン条約締約国会議 (Cop19) に全国楽器協会 (以下、全楽協) の CITES 委員として参加した。ブラジル政府から、ペルナンブコ材を象牙並規制の附属書 I に格上げする提案がなされたためである。ヴァイオリンの弓には、200 年以上に渡ってブラジル原産の希少木材ペルナンブコがスティック材として使用されてきた。附属書 I に格上げされると商業取引ができなくなることから、弦楽器市場に大きな混乱が起きることが予想された。私は普段、老舗弦楽器専門店と弦楽器メーカーの社長を兼務し、ペルナンブコ製弓の製造販売を展開している。この提案が採決されれば、輸出はもとより国内市場でも売買ができなくなり、事業に大きな影響が出る恐れがあった。本稿では、関係者の多大なるサポートにより、全楽協 CITES 委員として国際会議に参加した私の経験を共有したい。楽器と素材の未来について広く論ずるきっかけとなれば幸いである。

2. ペルナンブコ材 (ブラジルボク) について

まず、ペルナンブコ材の基礎知識をまとめておく。ペルナンブコ材は、ブラジルでは、Pau-brasil (学名: Paubrasilia Echinata) と呼ばれている。日本語の正式名称はその訳語のブラジルボクであるが、ブラジル北東部のペルナンブコ州の材が最高級であることから、弦楽器業界ではペルナンブコ (またはフェルナンブコ) という俗称で知られてきた。ブラジルボクは、マメ科の常緑高木で美しい花を咲かせる。ブラジリンという赤い染料が取れることから、ブラジル発見当初の主要輸出品目であり、国名の由来となった。弓作りには赤くなった幹の心材を使用する。ブラジル国民には国の木として広く知られているが花のイメージが強く、私が訪伯して出会った人の多くが弦楽器の弓に使用することを知らなかった。

ブラジルボクは、マタ・アトランチカ (Mata Atlantica / 大西洋岸林) にのみ生息している。マタ・アトランチカはアマゾンと並ぶ世界有数の森林地帯で、ブラジルの大西洋岸に沿って約 5,000km、17 州に跨って分布している。マタ・アトランチカには約 20 万種の生物と 25,000 種以上の植物が生息し、生物多様性の高い地域として知られる。植物の生物多様性では密度でアマゾンを抜き、世界で最も高い。ポルトガル人カブラルがブラジルを発見した当時 (1500 年)、マタ・アトランティカの面積は 130 万 km² で、国土の約 15% を占めていたと推測される。その後の国土開発によって、現在は発見当時の面積のわずか 8%、10 万 km² にまで減少した。ブラジルボクは、染料として発見当時から乱獲されたため、その生息域は発見当時のわずか 5% まで減少している。そのため、2007 年にワシントン条約の付属書 II 類にリストされ、原材料の輸出入が制限されてきた。

3.ペルナンブコ材（ブラジルボク）と弓

ペルナンブコ材はヨーロッパに染料として輸入されていたが、18 世紀末にフランス・パリの弓職人フランソワ・グザヴィエ・トゥルト (François Xavier Tourte 1747–1835) がスティック材として採用すると、ペルナンブコ材は高級弓の代名詞となった。トゥルトは、弓のストラディヴァリウスと呼ばれ、現代において演奏に使用する近代弓の発明者として知られる。前時代のバロック弓は、矢を射る弓と同じ方向に曲がっていたが、トゥルトはそれを逆反りにして、より大きな音量と高い演奏性を実現した。ペルナンブコ材は、固さ・密度・柔軟性・美観に優れ、近代弓の設計と相性がよく、他の素材の弓と比べ、音色が極めて良かったため、当時の優れた奏者に好まれたのである。

株) アルシェは 1983 年、日本から世界最高の弓をつくろうという志で創業し、フランスの歴史的な弓を目標に弓作りを続けている。2023 年に 40 周年を迎え、現在では世界的ヴァイオリニストの三浦文彰さんに愛用いただくなど、プロ・アマ問わず、多くの音楽家に愛されるメーカーに成長することができた。その理由のひとつは、弓作りにおける素材の重要性を創業当初から認識し、常に最高の材料を求めてきたからに他ならない。しかし 2007 年、ペルナンブコ材がワシントン条約 II 類に登録されると、ブラジル政府の輸出許可が必要となり、入手が極めて困難な状態が続いた。

ところが 2013 年、私どもは弓 26,000 本のペルナンブコ材の正規輸入に成功した。この材は、当時 80 代の楽器職人ジョアン・バチスタ氏が 50 年以上にわたって収集したもので、高齢のため一括購入が条件であった。個人製作家では経済的に難しく、私どものようなメーカーに話が回ってきたのである。私は事業の将来を吟味し、製作部門の責任者として購入に踏み切った。一括購入は零細企業にとって社運を揺るがしかねない大きな決断であった。実際に現地ブラジル・ペルナンブコ州を訪問し取引に関わったおかげで、ブラジルやペルナンブコ材を取り巻く状況や実務について詳しく勉強することができた。

4.ワシントン条約 (CITES) について

ワシントン条約の正式名称は「絶滅の恐れのある野生動植物の種の国際取引に関する条約 (Convention on International Trade in Endangered Species of Wild Fauna and Flora)」である。1973 年にアメリカが主導し首都ワシントンで条約が採択されたことから、日本ではワシントン条約の名で広く知られる。海外では英語名の頭文字を取り CITES と呼ぶ。現在、気候変動や過度な開発などの要因により、多くの野生動植物が絶滅の危機に瀕している。ワシントン条約の目的は、輸出国と輸入国とが協力して国際取引を制限し、種の絶滅を防止し保全を図ることである。現在は 184 の国と地域が加盟しており、2、3 年に一度、締約国会議 (Conference of the Parties) が開かれている。

5.ワシントン条約・第 19 回締約国会議 (COP19)

この項では、私が全楽協 CITES 委員として国際会議 CoP19 に参加した経緯を紹介する。最初のきっかけは、2022 年 6 月 23 日に CITES 事務局がブラジル政府案を明らかにしたことであった。ブラジル政府は、弓製作に起因する違法取引が横行しており、ブラジルボクの商業取引禁止が妥当だと主張してい

た。私にもブラジルで数年前から IBAMA（環境・再生可能天然資源院）による密輸の摘発が続き、規制が強化されているとの動きが伝わっていた。

7 月になると、欧米の音楽・楽器業界からブラジル提案に反対の声が上がった。ペルナンブコ材の弓製作は音楽文化と深く結びついており、単なる禁止でなく持続可能なあり方を目指すべきだというものだった。21 世紀になり欧米ではブラジルボク保全団体の IPCI（International Pernambuco Conservation Initiative）が設立され、植林が始まっていた背景もあった。ベルギー・ブリュッセルの弓製作家で友人のピエール・ギヨーム氏からは「国際社会で日本の存在は大きい。日本政府に働きかけて欲しい」と直接依頼があった。

最初は具体的な行動が思い浮かばなかったが、楽器と希少素材の問題は、弦楽器だけの問題ではないと考えるようになり、全楽協に相談することにした。執行部や事務局の方々は即座に危機意識を共有し、真摯に対応して下さった。私が草案を作成し、9 月 9 日西村経産大臣に要望書が提出された。要望を受けた日本政府は、ブラジル政府の懸念には理解を示しつつも、付属書 I への格上げは早急との立場を表明した。働きかけを始めた当初には予想もできない結果であった。これも楽器業界が日本の重要産業のひとつで、経産省にパイプを持つ全楽協のような業界団体があるおかげだと実感した。

9 月 22 日には、朝日新聞がこの問題を記事として取り上げてくれ、徐々に世間の注目も集まるようになった。こうして経産省の担当官との協議が始まると、次第に問題が専門化してきた。アドバイスを受けていた欧米の仲間に相談すると、業界側にも専門家が必要であり、立場を取るべきだと後押しされ、最終的にパナマへの渡航を決意した。全楽協には CITES 委員の立場を与えて頂き、NGO の代表として現地入りすることになった。

11 月 12 日に現地パナマへ入り、翌日エントリーを済ませると、欧米の音楽・楽器業界の NGO 関係者と顔合わせすることになった。事前にビデオ会議等で話していたものの、実際には初対面だったが直ぐに意気投合した。14 日に会議が開幕すると審議に参加し、その仕組みを学んだ。会期は 2 週間で、様々な議題が取り扱われる。NGO は締約国と異なり議題の採択権はないが、議論に参加し意見を表明できる。審議以外の時間は、互いに情報交換をしたり、政府関係者に意向を伝えたりとロビー活動を行った。

日本はワシントン条約に比較的寛容な立場で、象牙やサメの問題では日本への批判もあった。それに比べ EU 諸国のエコロジーへの意識は極めて高いが、これには法的枠組みの違いも影響している。日本では経産省がワシントン条約で国際取引を、環境省は種の保存法で国内市場を管轄している。つまり、象牙の国際取引はできないが、象牙の印鑑が国内流通するという二重構造が成り立つのだ。一方 EU は、ワシントン条約と国内市場が連動するため、付属書 I に格上げされると一切取引ができない。また EU は決議において 27 票を有しており、その動向は審議に大きなインパクトを齎す。環境問題に対する EU の動向は注視すべきだと痛感した。

17 日には遂にブラジルボクの審議が始まった。日本、アメリカ、EU が一致してブラジル提案に反対を表明、議長は議論の収拾がつかなくなる恐れがあるとして、関係国と NGO で作業部会を編成するよう勧告した。作業部会での議論は紛糾したものの、NGO として参加した音楽・楽器業界の粘り強い交渉が実を結び、注釈に変更を加える条件で付属書 II に留まることになった。作業部会の決定は、最終日の

25日の本会議で正式に承認された。新注釈では製品も規制対象となったが、再輸出品が除外された。つまりブラジルからペルナンブコ製品の輸出は不可能となったが、ブラジル国外での取引は今まで通りである。規制強化は最小限に留まり、ステークホルダーにとって最高の結果だった。

6. 今後の課題

CoP19でブラジルボクは附属書IIに留まったが、ブラジル政府の危機感は未だ強く、2025年に開催されるCoP20に向けて、政府やNGOに協力目標が課せられている。具体的には、①違法取引対策への協力②ブラジルボクの自主的な在庫登録と管理③完成弓のトレーサビリティ・システムの構築④持続可能なサプライチェーン確立のための植林先の現状把握⑤ブラジルおよび締約国へのキャパシティビルディングの提案の5項目である。私もCITES委員として、国内のメーカーや個人製作者と協働して、材料の在庫管理と製品のトレーサビリティシステムの構築に取り組んでいる。最終的な目標は、植林材の利用が可能となり、ペルナンブコ製の弓作りが持続可能になることだが、植林した木が弓作りに使用できるには、少なくとも30年、長ければ100年かかると言われており、長期的な視野での活動が求められている。

7. おわりに

そもそもアコースティック楽器は、音量・音質・演奏性・美観の向上を求めて、希少木材や希少生物の部位を用いることで発展してきた。21世紀になると、欧州を中心に気候変動対策の必要性が叫ばれ、様々な規制が行われるようになった。今後は、楽器業界も、地球生態系と共生して持続的に成長・発展する経済社会の実現に向けて前向きな姿勢を示さなければ、生物資源を活用した楽器製造はさらに難しくなるだろう。一方で、私自身がヴァイオリン製作者であることから、ペルナンブコという素材が、弓作りの伝統だけでなく、音楽のクオリティや奏者のアイデンティティといった根源的な問題と結びついていることも熟知している。ウエルビーイングには豊かな音楽文化が不可欠であり、人の叡智を結集すれば環境保護との両立も可能だと信じてやまない。これからもこの問題に、長期的な視野で粘り強く取り組んでいきたい。

参考・引用文献

1. 国際緑化推進センター公式WEBサイト「森林再生テクニカルノート 荒廃地修復のための主な植栽樹種 ブラジルボク」
<https://jifpro.or.jp/tpps/wp-content/uploads/2023/01/Paubrasilia-echinata-Lam..pdf> (参照 2024-11-18)
2. 山添源二・豊田貴樹(2012)「ブラジル大西洋岸森林の生態及び保全」
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjiff/84/0/84_21/_pdf/-char/ja (参照 2024-11-18)
3. 外務省公式WEBサイト「ワシントン条約」<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kankyo/jyoyaku/wasntn.html> (参照 2024-11-18)
4. IPCI-USA 公式WEBサイト(2024) <http://www.ipci-usa.org/index.html> (参照 2024-11-18)
5. CITES(2022) CoP19 Prop. 49 <https://cites.org/sites/default/files/documents/E-CoP19-Prop-49.pdf> (参照 2024-11-18)
6. 違法伐採バイオリンの弓に危機 朝日新聞 2022-09-29 夕刊 P.9